ベネチアⅡ

えの

大学二年の春、特にあてもなくヨーロッパを旅行していた私は、高校の頃の同級生である水無灯里からの連絡を受けてベネチアへと足を向けた。彼女と知り合ったのは高校のマリンスポーツ部だ。マリンスポーツと聞くと人気な部活なような気もするが、活動場所が高校から遠いことや、何となくハードルが高そうなことが影響してか当時は部員数四人という半分沈みかけの部活だった。私は滑車やワイヤーのメカニカルな感じに惹かれてヨットを始めたのだが、灯里は「一番近くで海を感じられるから」という理由でパドルボートに乗っていた。部活が始まると彼女は一人でボードに乗って海に出て、特に何かするでもなく海の上を漂ってみたり、ボードの上で横になって昼寝をしてみたりとかなり自由な時間を過ごしていた。そんな灯里を見ながら「一応、部活なんだけどなぁ」と釈然としない気持ちにもなったこともあったが、彼女の柔らかな笑顔を前にするとそんな小さなことは綺麗さっぱり忘れてしまい、いつの間にか私も彼女と同じのんびりとした時間の中に佇んでしまうのであった。そんな高校の頃の思い出に浸りながらitaro(イタリアの高速鉄道)の車窓を眺めているうちに、目的地であるベネチア・サンタ・ルチア駅に到着した。

駅から出ると、そこは想像以上にベネチアだった。開けた視界の広場の前には大運河が横切っていて、静かに波立つ水面の上を船やゴンドラがゆっくりと行き来しており、そこにかかるクラシカルなアーチ橋はやや傾きかけた陽射しに照らされて、その優しげな古い大理石の色で道ゆく人々を穏やかな雰囲気の中に包み込んでいた。灯里のInstagramでちょくちょく写真を見てはいたものの、やはり本物の実在感というものは別格で、私は駅から出るや否や深い感動の波の中に取り込まれてしまっていた。

暫く駅前を散策したあと、私は一度宿に行って荷物を置くことにした。宿の名前はスイーツ・アッラ・マッダレーナ。高卒でベネチアのゴンドラ会社に入社した灯里のイチオシの宿だ。灯里から送られてきた地図をもとに、ベネチアの入り組んだ道を進んでいく。その道中もベネチアはベネチアの空気感を絶え間なく伝え続けていた。運河のゴンドラからはカンツォーネが聞こえ、街ゆく人々は長閑な笑みを浮かべ、煉瓦造りの街並みはその浮ついた雰囲気を伝統の重みでしっかりと現実に繋ぎ止めている。こういう素晴らしい場所のことを人はよく夢の国と言うが、ここベネチアに関してはより趣深い何か美しい言葉が必要だと思う。

慣れないスーツケースを持っての移動に少し疲労を感じ始めた頃、ようやく宿に着いた。小さな運河に面したこの宿は、運河を跨ぐ小さな橋が入り口となっており、これもまたベネチアならではの光景だった。最初見た時は橋を渡ってホテルに入るという発想が全く無く、近くのカフェ店員や、道の地元の方らしき人に聞きながら入り口を探し回ったというのは灯里には内緒だ。どうやら古い民家を改装した宿でロビーは無いらしく、ドアのブザーを押して少しすると何処からともなく私服の管理人が現れて鍵を渡してくれた。中は綺麗に塗装された木造で、床のタイルと天井に見える木の梁がいい味を出していた。私の部屋は運河に面した一階にあり、窓からは時折ゆっくり進むゴンドラを見ることができた。

夕方になり、灯里の仕事が片付いたとの連絡を受けた私は待ち合わせ場所のリアルト橋へと向かった。行き交う人々の中で灯里を見つけられるか少々不安ではあったが、やはりあの綺麗なピンク髪はベネチアの街でも一際目立っていてすぐに見つけられることができた。

「久しぶり〜」

あの頃と変わらない気の抜ける声で灯里が挨拶してくる。「久しぶり」と返して少し談笑した後、私と灯里はベネチアの街へ歩き始めた。

話題はやはり高校卒業後から今までの話だった。私は第一志望の大学に落ちた関係で、卒業後はしばらく東京の兄の家で浪人生活をさせてもらっていた訳なのだけれど、灯里は高二の時点でベネチアでの就職を志ざしイタリア語の勉強を始めていて、その成果もあって高校卒業後はすぐにイタリアへと旅たってしまったのだ。彼女は普段のホヤホヤした印象とは反対に、自分のやりたいことに対してはしっかりと行先を見据えて行動できる人だった。そんな灯里が、ここ数年どのように過ごしてきたかは、どうしても興味があった。一通り私の身の上話が終わったところで、ちょうど眺めの良いベンチがあったのでそこに座ってゆっくり灯里の話を聞くことにした。

ベネチアで新たにできた友だちの話、大きな猫との不思議な出会いの話、ベネチアにたくさん隠れている素敵の話、そして、お世話になった先輩の話。灯里の口から流れてくる様々な物語は、凡庸な大学生活を送っている私にとっては想像もできないものばかりだったけれど、話の節々で変わらない灯里の穏やかな心を感じることができて、刺激的ながらも優しく心に沁みるものだった。

深く話し込んでいるうちにあたりはすっかり暗くなってしまっていた。私たちは一旦話を切り上げて近くのレストランで夕飯を食べ、また明日会う約束をしてその日は別れることにした。私はベネチアの名物らしいイカ墨のスパゲッティと、アンチョビのスパゲティを頂いたのだが、どちらもとても美味しかった。

翌日、ちょうど仕事が休みらしい灯里にベネチアを案内してもらうことになった。昨日の話に出てきた所も沢山あり、まるで物語の中に入ったような感覚だった。

↑有名なリアルト橋と、そこからの眺め↓

↑サン・マルコ広場の鐘楼からの景色

↑ゴンドラを修理したり作ったりする作業場

↑ボーヴォロ階段。灯里たちがパーティをした場所

↑灯里のちょっぴり秘密の場所。顔の像もある

↑大運河の出口。大きな聖堂も見える。

↑教会の地下室に水が張っている様子

灯里のゴンドラにも乗せてもらった。細い水路や船の隙間をスルスルと抜けていくオール捌きは本当に見事なもので、なんだかんだで部活での練習？も役立っているんだなあと思った。

昼食は、道中で少しサンドイッチを食べた後、灯里オススメのピザ屋さんに行った。ここのマルゲリータはトマトもチーズも生地も全て本当に美味しくてびっくりした。私の中では間違いなく今まで食べた中で一番美味しいピザだった。

夜。一日中歩き続けた私たちは、サンマルコ広場のベンチに座っていた。
「楽しかったぁ。今日はありがとね。案内してくれて」
「ううん。私も暇だったから」
そう言う灯里の顔には僅かに陰りがあった。私が少し心配そうに眺めていると、
「あれ、私、顔に出てた？」
と言って、困ったような笑みを向けてきた。
「実はこの前私の先輩が会社を卒業しちゃって……それで、帰ったらいつも私一人で」
「そっかぁ」
久々に見る灯里のその表情に気を取られて、私はぼんやりとした相槌を打った。
「だから、来てくれるって分かった時はとても嬉しかった。こちらこそありがとうだよ」
感謝の言葉に、私は「いえいえ」と返す。
「あ、でもずっと寂しいわけじゃなくてね、愛華ちゃんやアリスちゃんとは今でもよく遊ぶし、暁さんやウッディさんはよく遊びに来てくれるし、アリシアさんも～」
私に心配させないように気を遣ってか、灯里は最近の楽しかったことを次々と話し始めた。灯里が寂しがり屋なことも、それくらいじゃビクともしない子だということも分かってるから、そこまで気を使わなくてもいいのにと思いながらも、ベネチアでも皆から愛されていることが分かる灯里のエピソードはどれも面白くて、つい聞き入ってしまった。
暫くすると、いつの間にか話の流れの中で寂しさの話題がどこか遠くへと過ぎ去っていた。いつも通りの雰囲気でいつも通りのなんでもない会話をしていた私たちは、段々と眠気が近づいてくるのを感じて今日はお開きにすることにした。
そして「じゃあねー」「はひー」と簡単な挨拶を交わした後、私たちはそれぞれの道へと帰った。

３日目からは灯里は仕事が入っていた為、私一人でベネチアを廻ることとなった。やはりこの歳で会社を切り盛りするのは相当大変なようだ。

・ムラーノ島

この島は、ベネチアガラス発祥の地とされ、多くのガラス職人が住んでいる。昔はベネチアガラスの技術を外に漏らさない為に島の外に出ることを禁止されていたこともあるらしい。街道には綺麗な職人手作りのガラス細工がずらりと並び、あちこちで太陽光が反射してキラキラと光っていた。

・ブラーノ島

ムラーノ島に行ったついでに、隣のブラーノ島へも行くことにした。この島は漁師の島で、自分の家が分かりやすいようにそれぞれ家に色を塗っており、近年はテレビなどの影響でインスタ映えスポットとなっているらしい。地盤関連の勉強をしている私としては街中にある塔が傾いている方がかなり衝撃的だった。

・サン・マルコ寺院

サンマルコ広場から見える寺院。中は小さなタイルで作られた絵画が壁一面に敷き詰められていて、当時の人々の執念のようなものを感じることができた。

・ドゥカーレ宮殿

サン・マルコ寺院の隣にある宮殿で、今はゴンドラ教会のオフィスとして使われている（実際は博物館）。中には数多くの絵画と、とても豪華な装飾が施されていて、ベネチアというかイタリアの芸術に対する本気さが伝わってきた。ここからあの有名な溜息橋にも行くことができ、その先の牢屋も見学できるのだが、溜息橋から見える景色と牢屋との差は凄まじく、罪人がこの橋でため息をつく訳がわかった。

5日ほど滞在してそろそろ資金も少なくなってきたので、私はベネチアを離れることにした。その旨を灯里に連絡したところ、昼休みにお見送りをしてくれるとの返信がきた。私ももう一度灯里に会いたいと思っていたところなので、その言葉に甘えてお見送りしてもらう事にした。

サン・マルコ広場で待ち合わせた私たちは、まだ少し時間があった為、広場のカフェ・フローリアンで軽食を取る事にした。このカフェはとても古くからこの広場にあるカフェで、カフェラテ発祥の地とされているらしい。内装も食器もすごく豪華で、飲食物のお値段もなかなかなものだったが、どうせならという事で奮発してクロワッサンのサンドイッチと名物カフェラテを注文した。

「ベネチア旅行、どうだった？」

同じくカフェラテを飲みながら、灯里がそう問いかけてきた。

「楽しかった。本当に。想像していたよりもずっと綺麗で和やかで。できることならずっとここに居たいと思うくらい。いつの間にかあまり感じなくなっていた心が沸き立つようなこの感覚、久しぶりに感じることができたよ」

私がそう心からの思いを伝えると、灯里は

「ふふ。良かった」

と、とびきりの笑顔でそう言った。

別れの時間の雰囲気を感じながら、2人でポツポツと言葉を交わしてカフェラテを飲み終えた私たちは、代金を支払い、店を出た。

「それじゃあ」

そう言って駅へと向かおうとした時、後ろから灯里の声が聞こえた。

「ねえ、見て」

振り返って灯里の示す方を見てみると、サン・マルコ広場の至る所から水が湧き出していて、あちこちに大きな水溜りを作っていた。

「うわぁ、凄い！」

私が驚いて声を上げると、灯里は少し寂しそうな顔でにっこりと笑いながら

「ベネチアの街もお別れの挨拶をしにきたのかも」

と言った。

「ふふ。そうかもね」

いつものように小恥ずかしいセリフを躊躇いなく言う灯里に、私は静かな懐かしさを感じていた。

「ねえ、また来てもいい？」

「はひ」

灯里の嬉しそうな返事を聞いた私は、きっとまた来ようと心から思うのだった。

そして、

「それじゃあ、またね」

ともう一度灯里に、そしてベネチアに別れを告げ、次の目的地へと足を向けた。

後ろで手を振ってくれている灯里の気配が、いつまでも暖かかった。

FLORIAN
CAFFE

こんにちは。えのです。
ここまで長々と読んでいただきありがとうございました。
最初は普通にARIAの聖地巡礼と、ちょっとした旅行記を書こうかなと思っていたのですが、せっかくアニ研の冊子に載せるのだからもう少しアニメ要素を強めてみようということで、現実世界に水無灯里がいるという想定で書き進めてみました。これが案外面白くて、存在しないはずの水無灯里が私の記憶の中でジワジワと実在感を帯び始めて、存在しない記憶が次々と湧いて出てきたのです。何か記憶に対して恐ろしい侵犯をしているような気がしなくもないですが、まあ楽しいので一旦OKでしょう。皆さんも是非やってみて下さい。
ベネチアは、本文で書いた通りとても良い場所です。少し壊れた建物からはなるべく当時と同じ形、同じ見た目で復元しようとしてきた痕跡が見え、街の人々のこの街に対する愛情が伝わってきます。また、今でも車が入れない街なので、昔から区画整理はほとんど行われず貴族時代の街並みや建物がそのままの形で残っています。郵便配達やごみ回収もそれ専用の船で行っていますし、救急車も船です。街の人は歩きか自分の船か四角いバスのような船で移動しています。ARIAでも扱われたトラゲッタは今も現役バリバリですし、とにかく、あまりにも文化や生活様式が違いすぎて、どうしようもなくファンタジーなわけです。それでいて、どうしようもなく心が落ち着くのがベネチアの凄いところ。
どこか異世界のような場所でゆっくり休暇を過ごしたいという方は是非ベネチアを訪れてみて下さい。
きっと想像以上の何かがあるはずです。